

当報告の内容は、それぞれの著作の著作物です。Copyrighted materials of the authors

報告書

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）フィールドサイエンス研究企画センター主催 フィールドネット・ラウンジ企画

「フィード(feed) × フィールド(field) : 食べさせる／られる行為から社会関係を読み解く」

開催日時：2015年2月28日（土）10時～18時

開催場所：AA 研・303 大会議室

参加人数：打ち合わせ 13 名、公開シンポジウム 28 名

概要：

フィードとは、食べものを（直接あるいは誰かを指示・管理することによって）準備し、誰かに提供する行為を指す。この「提供する」という言葉には、食べものを渡す（手渡す、食卓に並べる、口に入れる、郵送する）、食べるように仕向ける、という行為を含む。

食べさせる／られる行為を介して関係性が形成される現象は、通地的に広く見られる。この行為を介して生み出される社会関係は、個人間の関係、家族関係、地縁関係、宗教集団内の関係など、多岐に及んでいる。

本企画では、食べさせる／られるというフィード (feed) の行為から生み出される社会関係について、多様な地域および学問領域から検討した。

趣旨説明・キースピーチ（発表者：澤野美智子）では、本企画の趣旨や着想の経緯について説明し、フィードについて研究することの意義と可能性について検討した。

第一部では、ミクロレベルからマクロレベルに至るまでのフィードについての検討を行った。

セッション 1 「「食」からみる難民の生活世界」（発表：久保忠行、コメント：佐藤靖明）では、通常は「食べさせられる」側と見なされる難民が、調査者に対しては「食べさせる」存在でもあることに注目し、その視点から難民の生活世界を描き出した。

セッション 2 「非ムスリムがムスリムに食を提供すること」（発表：阿良田麻里子、コメント：安井大輔）では、現代日本でムスリム用の食べものを提供する際の基準の乱立状況や、世界規模でもハラール認証の複層性が見られることについて検討した。

セッション3「広義の食料政策：何をどう食べさせる／食べさせられているかを研究する新たな取り組み」（発表：平賀緑、コメント：秋津元輝）では、マクロな視点から、個人の意識しないレベルで特定のものを「食べさせ」ている、グローバル規模のフード・ビジネスやフード・ポリシーについて検討した。

第二部では、主に医療現場や家庭におけるフィードに関する検討を行った。

セッション4『ジェイン・エア』と『嵐が丘』における食べさせる／られる行為」（発表：川崎明子、コメント：田中壮泰）では、両作品における比喩的食物と字義的食物の現れ方の違いに注目し、それらがそれぞれの作品の展開にどのように影響しているかを検討した。

セッション5「制度／施設化された「食」—抑うつ性昏迷のため長期間にわたり経口摂取できなかった高齢女性の事例から」（発表：吉田尚史、コメント：梅村絢美）では、2人の入院患者の事例をもとに、病院において食の行為が管理される様相について検討した。

セッション6「現代日本における妊娠期女性の調理実践と意識の変容」（発表：大淵裕美、コメント：村田泰子）では、初産婦の日記から、夫ら家族成員とお腹の中の胎児のそれぞれ異なる食べ物の要求のなかで女性がどのように食べものを選択し「食べさせ」ているかについて検討した。